後宮生活秘録と自己省察と

——紫式部日記における消息文の意義——

原田敦子

(一)

この次に、人のかたちを語りきこえさせば、物いひさがなくや侍るべき。ただいまをや。さしあたりたる人のことは、わづらはし、いかにぞやなど、すこしもかたほなるは、いひ侍らじ。[1]

紫式部日記において、いわゆる日記的部分から消息文的部分へとこのように筆を進めたとき、作者はどのような内的必然性に支えられていたのであろうか。この日記における日記的部分と消息文的部分の関係はきわめて難解であるが、私は、前者は、中宮女房としての紫式部が主人道長の要請によって書いた道長家栄華の記録であり、[2]後者は、この栄華の記録の借覧を友人に乞われ、その第一部（冒頭より寛弘六年正月の記事まで）を清書して貸与するとき、これにつけた添手紙[3]と考える。従って、両者は明らかにその執筆目的も読者対象も異にするのであるが、日記的部分第一部の末尾が消息文への移行を準備し、過渡的段階をなしていることにより、きわめて滑らかな接続関係を形作っているということができる。

寛弘六年正月三日の若宮御戴餅の儀を叙しきたった紫式部は、大納言の君、宰相の君の役割と装束を記したのち、ふと筆を走らせて宰相の君の容姿をとらえた。

いとをかしげに髪などもつねよりつくろひまして、やうだいもてなし、らうらうしくをかし。

が、この段階では、宰相の君の容姿の描写は「つねより」異なった行事の場における様態の描写にとどまるのであり、日記的部分にもこのような例は散見される。

こよひの御まかなひは宮の内侍、いとものものしく、あざやかなるやうだいに、元結ばえしたる髪のさがりば、つねよりもあ

らまほしきさまして、扇にはづれたるかたはらめなど、いときよらに侍りしかな。　（寛弘五年九月十五日）

色々なるをりよりも、おなじさまにさうぞきたる、やうだい、髪のほど、くもりなく見ゆ。　（同五年九月十六日）

右のごとき例においては、女房の容姿美は普段と異なった行事の場における特殊相として述べられ、そこに行事の華やかさをもうたいこめている。しかし式部は、先の御戴餅の儀の記事においてさらに筆をのばし、

丈だちよきほどに、ふくらかなる人の、顔いとこまかに、にほひをかしげなり。

と、行事の場におけるのではない、平常の宰相の君の容姿をも描出した。この逸脱が次いでは大納言の君、宣旨の君の容姿の描写へと進み、さらには消息文の女房月旦へと大きな展開をとげたのである。日記のこの時点における逸脱は、恐らく、日記的部分第一部の終りに位置する若宮御戴餅の儀を清書しおえた安心感によるものであろう。

だが、行事記録の中で女房の容姿をとらえるという営為は、きわめて小さな逸脱のようであって、その実、その意味するところは重大である。そもそも紫式部日記が継承したと思われる、仮名の歌合日記に代表される晴儀の記録の系譜[4]において、儀式に登場する女房の容姿が名ざしで描出されたことは一度もないからである。わずかに天徳四年内裏歌合の仮名日記甲に、

又、童四人、洲浜舁きて参る。装束は、青色に柳襲、丈のほど髪の長さよく整ひて、かたほならず。[5]

との描写があるが、これとても歌合の場において童四人の背丈、髪の長さがよくそろっていて見よいというのであって、容姿そのものが問題とされているのではない。歌合日記にあっては、装束や調度や洲浜が美的好尚の対象として前面に押し出されるのに対して、女房や童は行事の一点景にしか過ぎないのであった。紫式部日記の行事記録においても、この伝統を継いで、調度や女房の装束の描写に多くの力がそそがれているのに対し、女房の容姿にまで筆が及んだのは、わずか数カ所にしかすぎない。しかもそれらは、すべてその時々にあらわれた容姿の特殊相をとらえたものであって、平常の一般相にまで及ぶものではない。従って、若宮御戴餅の儀における宰相の君の装束からその容姿へ、容姿の特殊相から一般相へと筆をのばしたとき、式部はまさに晴儀の記録の先蹤たる歌合日記の伝統を振り切ったということができる。それは同時にまた、式部が我身にまつわりつく道長家栄華の記録という呪縛の糸を断ち切ることをも意味した。個人の容姿そのものに焦点をしぼって叙述することは、時間空間共に行事儀式という特殊な場から解き放たれると同時に、

叙述態度を準公的、記録的なものから、私的、随想的なものに転換することをも意味したからである。

しかし、この転換は突如として行われたものではなかった。紫式部日記の日記的部分の中には、既に個々の人間に対する作者の強い関心が随所に表現されている。例えば没主体的とも見える装束の描写にしても、歌合日記では、装束は歌合における役割に付随して叙述されるのに対し、紫式部日記では、個々の女房について多くは名ざしでその着ている装束が記されているのである。

その後、殿上童、銀・金の藤の折枝を執りて、員刺すべき洲浜を童二人舁きて続きたり。これらも赤色に桜襲着たり。右の髻四人、装束は青き白き椽に、柳襲着たり。（天徳四年内裏歌合仮名日記乙）

大輔の命婦は、唐衣は手もふれず、裳を白銀の泥して、いとあざやかに大海にすりたるこそ、けちえんならぬものから、めやすけれ。弁の内侍の、裳に白銀の洲浜、鶴をたてたるしざまめづらし。ぬひものも、松が枝のよはひをあらそはせたる心ばへかどかどし。（紫式部日記　寛弘五年九月十五日）

歌合日記の装束の叙述においては、装束を着ている人物と作者との間に内面的な交渉が見られない。これに対して紫式部日記では、作者の女房の装束に対する執念いまでに強い関心が、単なる行事記録の一翼を担うものとしての役割を超えて、晴の場でそのような装束をつけている女房の内面に向けられ、そこに一個の女房の人間像を浮かび上らせようとしているのであった。紫式部日記の装束描写の、歌合日記のそれとの顕著な差は、人間の内面に相わたるか否かという点に存するのである。こうした意味で、紫式部日記の行事記録が女房月旦を胎生させる基盤は、既に熟成していたと見ることができよう。紫式部が女房の容姿批評を、準公的な道長家栄華の記録から私的で自由な随想録への転換の突破口としたのは、きわめて自然かつ必然の所為であった。

かくして一度手にした自由な叙述態度を、記録ではなく、日記を貸与する当面の相手への私的な書簡として処理する決心がついたとき、式部は文勢を一転し、「この次に…」で始まる、きわめて未整理で晦渋ではあるが、彼女自身にとってはこの上なく自由な文体の中に、己れの欝屈した心情をそのまま投入していったのであった。

（三）

かういひいひて、心ばせぞかたう侍るかし。それも、とりどりに、いとわろきもなし。またすぐれてをかしう、心おもく、かどゆゑも、よしも、うしろやすさも、みな具することはかたし。さまざま、いづれをかとるべきとおぼゆるぞおほく侍る。さも

けしからずも侍ることどもかな。

中宮女房の容姿批評を一わたり終えた式部は、すぐ「心ばせ」に言及して、全然とるべきところのない人もいないかわりに、思慮、才覚、風情、趣、信頼すべて具備しているというようなこともなかなかないと、冷静な感想を洩らしている。装束から容姿に発展した式部の関心が、ここであらためて「心ばせ」にまで進展するのは、自然の趨勢であった。[6] 式部は既に宰相の君（遠度女）の容姿批評において、

心ざまもいとめやすく、心うつくしきものから、またいとはづかしきところ添ひたり。

また小少将の君の容姿批評においても、

心ばへなども、わが心とは思ひとるかたもなきやうに物づつみをし、いと世をはぢらひ、あまり見ぐるしきまで児めい給へり。

と、その「心ざま」「心ばへ」を併せ評しているのであり、同様の批評は宮の内侍（「心ざま」「人がら」）についても行われている。外面の美に対する内面のあり方、それが言われなければ真の批評は成立しない。紫式部はいかなる場合にも、一面的な物の見方には満足できないのであった。

通常この「かういひいひて…」の一文は、十人の女房の容姿批評のまとめであると同時に、以下の叙述の発端ともなっていると考えられている。[7]

斎院に、中将の君といふ人侍るなり。聞き侍るたよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人とりて見せ侍りし。いとこそ艶に、われのみ世にはもののゆゑ知り、心深き、たぐひはあらじ、すべて世の人は心も肝もなきやうに思ひて侍るべかめる。

式部は斎院御所の優位性を吹聴した中将の君の独断に、

すずろに心やましう、おほやけばらとかよからぬ人のいふやうに、にくくこそ思う給へられしか。

と激しく反発し、その「文書き」にあらわれた中将の君の「心ばせ」の浅さを論証するために、斎所御所と中宮御所の比較に入ってゆく。

ここのところの式部の論旨は、中将の君の主張にも無理からぬところがあると一応認め、そのために中宮方の気風の性格と、そのよって来たる所以を委曲を尽して論じた上で、それにしても軽率に他を批評することは厳に戒めねばならぬ、と言わんとするものである。しかし、書き進むうち、式部の筆は知らず知らず内情をよく知った中宮方に多く向けられ、その内容も次第に批判的な色彩を帯びて、熱っぽさを加えてゆく。式部の筆は中宮方弁護から中宮方批判へ、また一般論へと例によって曲折に曲折を重ねている。が、しかし、

。上臈中臈のほどぞ、あまりひき入りざうずめきてのみ侍るめる。さのみして、宮の御ため、もののかざりにはあらず、見ぐるしとも見侍り。

。ただおほかたを、いとかく情なからずもがなと見侍る。

。そのほかの上達部、宮の御かたにまゐり馴れ、物をも啓せさせ給ふは、おのおの、心よせの人、おのづからとりどりにほの知りつつ、その人ない折は、すさまじげに思ひて、たち出づる人人の、ことにふれつつ、この宮わたりのこと、「埋れたり」などいふべかめるも、ことわりに侍る。

かく繰返し言われるとき、式部の真意はもはや明らかであろう。式部の意図は中将の君批判から中宮方の批判へと移行し、それがために、斎院方と中宮方の比較は著しくバランスを失したものになっていったのである。

既に森一郎氏は、この中将の君の書簡に対する式部の反論がまことに屈折した韜晦的な文体であり、両者に公平なようでいて、その実、式部の真意は中宮の後宮批判にあったことを指摘されている。[8] 中将の君の書簡に対する式部の反駁が、当初から中宮後宮の批判を引き出すためのものであったとは考え難いが、紫式部の彰子後宮批判が、中宮方と斎院方を比較するうちついつい洩らした本音であることは、容易に理解されよう。これによれば、中宮方は斎院方に比

して文化的な雰囲気に欠け、仕える女房も引込み思案で才気に乏しいと言う。また女房達を統率する後宮の主人公中宮彰子にも、かっての皇后定子のような器量はなかったらしい。ということは要するに、彰子後宮には紫式部のもっとも重視する「心ばせ」が欠けていたことになる。式部は、中宮方の代表的な女房の容姿を賞讃しきった筆で、その女房達の気のきかなさに不満を向けた。これは何という皮肉であろう。中宮方の女房は、一人一人の人格はともかくとして、宮仕え女房としては単に美しいお人形に過ぎないと言うのであろうか。そもそも道長が良家の子女を集めて中宮付きの女房としたのは、これ等の女房達の才気によって彰子を盛り立て、その後宮の権威を高めるためではなかったか。女房はその後宮にとって、ある時には主人以上に重要な存在であった。中宮彰子とその女房に対する仮借ない批判は、彰子後宮の権威を失墜させ、ひいては皇子誕生によって約束された道長家の栄華をも傷つけるものであったはずである。

さらにこの一条は、「この次に…」以前の日記的部分と読み合わせるとき、異常な衝撃を読者に与えずにはおかない。既述のごとく、紫式部日記の日記的部分は紫式部が道長に要請されて書いた道長家栄華の記録であり、記述内容によって主家の繁栄をうたい上げると同時に、その文学的盛名によって彰子後宮の文化の顕彰をなす

という、二重の役割を負わされていた。[9] 式部はここにおいて、中宮、道長への讃嘆と同時に、善美を尽した行事儀式のさまや女房達の華麗な装束、さらには道長邸に群れ集い道長家の栄華を祝福する貴顕達の姿を描いている。しかるに、式部が口をきわめて讃美しきたった中宮の御前に展開される美の諸相、みやびの世界は、この中宮後宮批判の一条を読むに及んで、もろくも色あせてしまわざるを得ない。内面の美が失われた行事儀式、そこには空疎な美の形骸が横たわっているに過ぎないのであった。

紫式部日記の始発は作者にとって真に主体的かつ内発的なものではなく、式部はその素材の取捨選択、叙述態度に大きな制約を受けねばならなかった。日記的部分にあっては、中宮彰子や彰子後宮は、讃美されることのみが期待された対象であったのである。私的な書簡である消息文には、もはやその制約はない。ここにおいて、式部が常々不満を抱いていた彰子後宮の批判へ、内幕の暴露へと進んでいったのは、むしろ当然の成行きと言えるであろう。式部は自らの描き上げた道長家栄華の虚像にしたたかな一撃を加えて、ひそかにこれを破壊し去ったのである。

しかし、紫式部は、中将の君の書簡に対する批判に導き出されて、ついつい中宮方批判という本音を吐いてしまったのち、

斎院わたりの人も、これをおとしめ思ふなるべし。さりとて、わがかたの、見どころあり、ほかの人は目も見しらじ、ものをも聞きとどめじと、思ひあなづらむぞ、またわりなき。すべて人をもどくかたはやすく、わが心を用ゐむことは難かべいわざを、さは思はで、まづわれさかしに、人をなきになし、世をそしるほどに、心のきはのみこそ見えあらはるめれ。

と、最初の論点に立ち帰り、辛うじて構成上の破綻を救っている。式部は少なくとも表面上は、この条を中将の君の書簡に対する批判で一貫させつつ、実はその裏で中宮方批判をやってのけたのであった。が、いずれの場合にも、式部の眼は「心ばせ」にぴたりと向けられて微動だにせぬのであり、それが故にこそ、中将の君批判から転移した中宮後宮批判も「心ばせ」の論に収束し、やがては中将の君批判の論へと還元してゆくを得たのである。

(三)

中将の君の書簡批判に発する右の一条は、森氏も言われることく、[10] 他に対する批判であって、自己に対する批判ではない。従って他に対する批評という点で、次なる和泉式部・赤染衛門・清少納言の三人の批評へとなだらかに続きうるのである。式部は、中将の君の書簡に対する反発から転じて、もっとも身近な彰子後宮を批評し去り、次いで文学上気になる存在であった三人の才女をその射程内

に据えたのである。ここで注目すべきは、これら三人に対する批評が、作品の批評からともすれば創作態度の批評へ、三人の作者の「心ばせ」の批評へと傾きがちなことであろう。すなわち和泉式部については、その作品に関して、

歌は、いとをかしきこと、ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌よみざまにこそ侍らざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまるよみそへ侍り。

と、褒貶半ばする批評をしながら、その歌人としての見識に筆が至ると、

それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりぬたらむは、いでやさまで心は得じ、

と酷評し、結局その歌人としての価値は、

はづかしげの歌よみとはおぼえ侍らず。

と総括している。紫式部が和泉式部の「口にいと歌の詠まるる」歌風を或程度評価しながら、総合点を低くつけたのは、和泉式部が古歌の知識や歌作の理論に通じていないこともさることながら、それにもかかわらず、いっぱしの歌人気取りで他人の歌を非難したり批評していることを、減点の対象としたからであろうと思われる。

これに対し、紫式部は赤染衛門の作歌については、ほぼ穏健な賞讃に終始している。和泉式部や赤染衛門の歌に対するこのような批評は、紫式部の和歌観をあらわすと同時に、当時の世間一般のそれをも示しているのであろう。だが式部の場合は、決してそれのみに終わらなかった。

ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌を詠みいで、えもいはぬよしばみごとしても、われかしこに思ひたる人、にくくもいとほしくもおぼえ侍るわざなり。

式部は赤染衛門の作歌態度を好ましく思うにつけ、それと対蹠的な「われかしこに思ひたる人」の、目に余る作歌態度に言及せずにはいられなかったのである。ここでも式部の眼は、人の「心ばせ」をぴたりと見すえて動かない。さらに紫式部は、「われかしこに思ひたる人」の代表というような格で清少納言をとりあげ、

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち真字書きちらして侍るほども、よく見れば、まだいとたへぬこと多かり。

と、痛烈な批判の矢を射かけている。ここでは作品論、作者論以前の、まさに「その心」「その人となり」が問題にされていると言えよう。この日記を書くに当たって、紫式部が清少納言の枕草子を強く意識していたことは既に説かれるところであるが[11]、清少納言を意識することが強ければ強いだけ、生の形で清少納言その人、その人の「心ばせ」そのものを問題とせずにはいられなかったのである。

この三人の才女の批評に見られる不遜なまでの辛辣さに、ほぼ時代を同じうする文学者への強いライバル意識を指摘することは、あながち誤りではないだろう。が、それ以上に、常に人間のあるがままの姿に迫り、その真髄をくい尽さずにはいられない、人間探求にかけた紫式部の執念を見てとるべきであろう。

(四)

かく他を批評し去った式部の筆は、あたかも渦に吸いこまれるように、自己の生活へ内面へと回帰してゆく。他を辛辣に批判する口さがなさは、自己省察の苦渋によってのみあがなわれるのであった。

かく、かたがたにつけて、一ふしの、思ひいでらるべきことなくて、過ぐし侍りぬる人の、ことに行くすゑのたのみもなきこそ、なぐさめ思ふかただに侍らねど、心すごうもてなす身ぞとだに思ひ侍らじ。

以下の文章には、自身の「行くすゑのたのみもなき」わびしい生活が告白される。式部の生活は、里にあっては召使い達の目を憚り、宮中にあっても「ほけしれたる人」になりはてて、「おいらけもの」と見おとされることを甘受する極度に抑圧されたものであった。この日記の中に繰返し記される式部内面の憂悶は、生来の内攻的懐疑的性格に加えて、夫宣孝との死別により世の無常を深く思い知り、形成されてきたのであるが、それが女だけの口うるさい後宮[12]に入ることによって、より以上に式部を自分の殻の中に閉じこもらせ、自抑を強いることとなったのである。

まして人のなかにまじはりては、いはまほしきことも侍れど、いでやと思ほえ、心得まじき人には、いひてやくなかるべし、物もどきうちし、われはと思へる人の前にては、うるさければ、ものいふこともの憂く侍る。

式部にとってこうした抑制から解放される道は、書くこと以外にはなかった。しかし、物を書く人間—特に女の—に対する世間の評価は、昔も今も本質的にはそう変らない。

いと艶に恥づかしく、人見えにくげに、そばそばしきさまして、物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに見おとさむものとなむ、みな人人いひ思ひつつにくみしを、……。

学才をふりまわす物言いさがないけむたい存在…、式部を迎えた後宮の評価はおおむねそんなところで一致していた。式部の源氏物語が一条天皇にほめられたことを妬んで、「日本紀の御局」とあだ名して宮中に言いふらした左衛門の内侍の仕業は、こうした後宮の空気を代弁し顕在化するものであったろう。このような後宮にあって己

が身を守るために、式部はますます自抑を強めてゆかねばならなかったのである。

それ、心よりほかのわが面影をばっと見れど、えさらずさし向かひまじりゐたることだにあり、しかじかさへもどかれしと、恥づかしきにはあらねど、むつかしと思ひて、ほけしれたる人にいとどなりはてて侍れば、「かうは推しはからざりき。…（中略）…、見るには、あやしきまでおいらかに、こと人かとなむおぼゆる」とぞ、みないひ侍るに、恥づかしく、人にかうおいらけもの[13]と見おとされにけるとは思ひ侍れど、ただこれぞわが心とならひもてなし侍る有様、……

「恥づかしく、人にかうおいらけものと見おとされにける」と吐き出すように言うとき、式部は激しい恥辱にまみれつつ、「おいらけもの」なる自己をひたと見すえている。

紫式部の屈辱と自虐に満ちた後宮生活は、畢竟この「おいらけもの」なる語に集約されるのであるが、「おいらけもの」意識については、つとに木船重昭氏の精細な御論がある。氏によれば「おいらけもの」とは、「いかにも、いわゆるおだやかでおっとりしているようで、いわば温厚柔和従順な好ましい性格のように見えるものの、実は嘲笑すべきぼんやりもの」を意味する軽侮の語であり、その「客観的な構成成立の過程の軌跡と、彼女の思考形式・精神構造の曲折性・回帰性・内攻性・倫理性の生み出す具体的な思考・心理の軌跡との、奇しき類似性から考えて」、「紫式部の切実な魂の嘆き・悩み・呻きが吐き出さずにはおかなかったことば、すなわち、紫式部の造語である」と言う[14]。この式部の極度に抑制された宮仕え生活からは、

さまよう、すべて人はおいらかに、すこし心おきてのどかに、おちゐぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしも、をかしくうしろやすけれ。

との処世観が引き出されてくるのであった。しかし、この処世観は表面に読みとれるほどおだやかなものではなく、

人すすみて、にくいことしいでつるは、わろきことを過ちたらむも、いひ笑はむに、はばかりなうおぼえ侍り。いと心よからむ人は、われをにくむとも、われはなほ、人を思ひうしろむべけれど、いとさしもえあらず。

との「しっぺ返し」の強さを含む。自己を切りさいなむ倫理の刃は、畢竟他者にも向けられざるを得ない。ここに式部の倫理性の強さを見てとるべきであろう。式部はこの倫理性の故に、擬態をさらして後宮社会に交わってゆかねばならないことに堪えられなかったのである。

しかし、紫式部の強靱な精神は、自ら作り出した抑制の姿勢の中

にのめりこんでゆくことをしなかった。かえって、自抑し仮面をかぶって生き続けてゆく自己の姿を凝視し、冷厳にこれを描き出そうとしている。式部にとって、自身の抑制された生活と、時には不遜とも思われる処世観をかく書き記すことが、抑制からの唯一の解放であったと言えるであろう。

…、宮の、御前にて文集のところどころ読ませ給ひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、をととしの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけなながら教へたてきこえさせて侍る、隠し侍り。（中略）まことにかう読ませ給ひなどすること、はたかのものいひの内侍は、え聞かざるべし。知りたらば、いかにそしり侍らむものと、すべて世の中ことわざしげく憂きものに侍りけり。

「御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔」をしていたという式部の処世態度からすれば、他には秘密にしていた中宮への楽府進講の話などは言わずもがなのことに属する。「すべて世の中ことわざしげく憂きものに侍りけり」と言いながら、それをここにあえて書いたのは、この部分が親しい友人への私的な書簡であることと同時に、式部自身己れの抑制に堪え切れず、処世上自らが作り上げた仮面を引っぺがしたいとの欲求にかられたのではないか。しかも式部は、自分のことを「日本紀の御局」とあだ名して言いふらした左衛門の内侍を、「ものいひの内侍」と呼びなして、ここで仕返しをしている。まことに、己れに極度の抑制を強いた宮仕え生活に対する式部の恨みは、深く暗いものであったと言わねばならないであろう。

この自己抑制の姿勢は、既に式部の少女時代にその萌芽を見ることができる。

「口惜しう。男子にて持たらぬこそ幸なかりけれ」

と、父為時を嘆かせた式部の学才は、女であるが故に、その才を認め愛した父からも、それを持って世に進み出てゆくものとしては正当に評価されなかった。ここに、女であること、女が学を有することへの懐疑が生ずる。この有名な少女時代の逸話を単なる自讃談に終わらせぬ意義は、この点に存するであろう。この時より式部の眼は女と生まれた己が宿世のつたなさに注がれ、さらに内攻しつつ、女をそのような立場に置くこの世の条理を問いただす方向へと開かれていったのであった。[15]

紫式部は、学才を有し、その学才を認められぬでもない自己と、極度の抑制を強いられている自己とを描き出すことにより、「ほけしれたる人」になりはてている己が身の救済をはかったと考えられる。自己の真実を追求しつつ、その真の姿を偽って仮面をかぶって

生き続けねばならぬ苦悶、その苦悶を赤裸々に告白することにより、式部はひそかに自己を解放し、同時に、苛酷な抑制を強いる虚飾と中傷に満ちた後宮社会を激しく告発したのであった。かく考えれば、消息文の執筆は、自己の、また己が住む後宮社会の虚像を破壊し、その真実の姿に迫ろうとする真摯な営為であったと言うことができよう。

紫式部日記の日記的部分は、中宮彰子の皇子出産とそれに伴う晴儀の美を、道長家の栄華としてあわれ深くうたい上げている。もとより、ここに見られる栄華への讃嘆が、すべて主家より強いられたものであるとは言えない。否、むしろ、この時代の貴族社会に生きる者の常として、式部の中には栄華の美にひたすら傾斜してゆく姿勢があり、主人の御機嫌をうかがう女房根性が見てとれる。しかし同時に式部の中には、美に陶酔する自己を冷たくつき放し、これを凝然と見すえるもう一人の覚醒せる自己が住んでいるのである。日記的部分に描かれた栄華の諸相が、所詮は虚構でしかありえないことを誰よりもよく知っていたのは、作者である紫式部自身であった。

日記的部分においては、眼前に展開される栄華の世界を写しとりつつ、式部の筆は幾度かその栄華の相に同じえぬ己が内面へと回帰してゆく。しかしそれも束の間、外界に生起する事象にせきたてられるかのように、式部は道長家繁栄の諸相の中に立ちもどってゆかざるをえない。主家の栄華をあわれ深くうたい上げねばならないという準公的日記の作者のよって立つべき論理は、彰子後宮の内実へ筆を進めることは勿論、作者が自らの内的欲求に従って、眼前の栄華の世界からさしはなれた所に屹立する苦悩と憂悶に満ちた己が内的世界へ、深く分け入ってゆくことを許さなかった。私的な書簡である消息文には、もはやその制約はない。かくして、いわゆる消息文的部分は、日記的部分が準公的な日記、晴儀の記録であるのに対して、私的な書簡であると共に、後宮生活の秘録であり、また自己省察の記であるという性格を有するに至るのである。それは紫式部にとって、他に対しては「ほけしれたる人」になりおおせ、自己を偽って生きている自身を、内外両面から攻めたてることにより、逃れるすべのない厳しい自己検証の場に据えることでもあった。

(五)

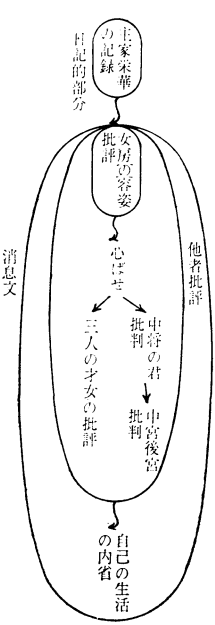
対象の外面の観察から内面の省察へ、これはこの日記の日記的部分にしばしば現れる思考のパターンである。しかして消息文においても、このパターンは幾度か繰返されている。中宮女房の容姿を批評しつつ、「心ばせ」に筆を転じたのもその表れであるし、中将の君の書簡への反駁から中宮方と斎院方の文明批評へと移行しつつ、

式部の意識は、それではその中宮後宮に住む自分は、自分のあり様はどうなのか、という点に回帰してゆく。

かういと埋れ木を折り入れたる心ばせにて、かの院にまじらひ侍らば、そこにて知らぬ男に出であひ、ものいふとも、人の奥なき名をいひおほすべきならずなど、心ゆるがしておのづからなまめきならひ侍りなむをや。

ここでは環境に多くを転嫁したきらいがないでもないが、引込み思案の私が斎院御所に身を置いたならばどうなるであろうかと、動的な物の見方を展開していることに注目したい。また三人の才女の批評にしろ、他に向けた批評の毒が常に我身を侵さずにいられないのは、自明の理であろう。

かくして、式部の筆は他を批評しつつ、その対象の内面へ、さらには自己へと向かい、小さなうねりをなす。そしてその小さなうねりを呑みこむ形で、他への批評から今度は自己の生活へ、自己内面の省察へと、大きなうねりをなして筆は進んでゆくのである。加えて言うならば、日記的部分から消息文執筆へと進んだこと自体が、外面から内面へという、より一層大きなうねりを示すものであった。従って消息文は、大きなうねりが小さなうねりを呑みこみつつ、自らもまたさらに大きなうねりに呑みこまれるという、複雑な波紋を描きつつ進んでゆくのである。



消息文執筆によって式部が問題にせんとしたのは、常に「心ばせ」―人の心であった。消息文がかく波及効果をもち、しかも重層した構成をなすに至ったのは、結局この部分が、自己の、また自己の住む後宮社会の虚像を破壊し実像を構築しようと試みつつ、全篇の主題を「人の心」という扇の的にひき絞ろうとしたからである。道長から主家栄華の記録たることを命じられた日記的部分にあっては、日記という形式すらが所与のものであり、素材の取捨選択の基準と叙述態度を準公的なものに規定されて、作者が己れの内なる秩序に従って自らの想念を紡ぎ出してゆくことは許されなかった。これに対して消息文では、「人の心」にぴたりと照準を合わせつつ、作者の内なる欲求に従って、外面から内面へという大小のうねりをなして叙述が進められてゆく。このように見てくると、消息文は内

容形式両面において、日記的部分に対する反措定であったと言うことができるのである。

日記的部分の行事記録の中に、有職的な関心や規範意識を否定することはできないであろう。だがしかし、式部の事実認識はそれだけに終わらなかった。紫式部は、一方に内面告白の欲求と、「漢文による記録の伝統をふり切る精神によって支えられている」[16]日記文学発生以来の伝統を持ちつつ、他方では主家の繁栄を顕彰する行事記録をなさねばならないという隘路に立たされたが故に、かえって自己の全生活をかけて眼前の事実を見すえ、自己にとっての事実の意味を鋭く問い直すことによって、単なる規範意識とは異なった、より高次の、より主体的な事実認識に達することができた。[17]紫式部日記の日記的部分は、準公的日記が主家の意を体した行事記録でありつつも、身の上の日記、内面告白の文学ともなりうるギリギリの限界を辛くも探りあてたのである。しかし、身の上の日記が公的制約を有する事実記録と共存しうる限界は、当然のことながら両者が乖離を始める起点でもあった。かくして、式部の内面告白の欲求は事実記録に別離を宣して、消息文なる新しい方法へ転進してゆくことを余儀なくされたのである。消息文執筆は、日記的部分の友人への貸与という外的事情に誘発されたとは言え、日記的部分を書き上げた紫式部にとっては、内的要請に基づく必然の所為であったと考えられる。

消息文執筆の事情からして、日記的部分といわゆる消息文的部分が、当初より企図された二部構成をなしていたとは考え難い。日記的部分に書くことができなかった中宮後宮の内実や、自己内面の憂悶に筆を進めたいという、漠然たる意図から書き始められた消息文であったが、書き進むうち、消息文は式部の中で日記的部分に対する内容形式両面での反措定として、明確な形をとり始めたことであろう。

日記的部分第一部に消息文の添えられたものは、友人に貸与されたが、

御覧じては疾うたまはらむ。

との要請にもとづいて筆者の手に返却され、既に書かれていた敦良親王誕生とそれに伴う行事儀式を中心とする日記的部分第二部と綴じ合わされて、式部の手許に保存された。ここに紫式部日記は、作者の手により二次的な成長をとげたのである。[18]そして、日記的部分なる「正」は、消息文なる「反」を合わせることにより、はじめて準公的な日記という枠を超えて、真の紫式部日記となりえたのであった。

註

① 以下本文の引用は、新版岩波文庫本による。

② 拙稿「紫式部日記の始発—道長家栄華の記録—」『国文学攷』第56号　昭和46・6

③ 拙稿「紫式部日記の消息文」『同志社国文学』第5・6合併号　昭和46・3

④ 拙稿「晴儀の記録の系譜と紫式部日記」『平安文学研究』第49輯　昭和47・12

⑤ 引用本文は日本古典文学大系『歌合集』による。

⑥ 宮崎荘平氏「『紫式部日記』における消息文的部分の検討」『文学・語学』第42号昭41・12　後に『平安女流日記文学の研究』所収

⑦ 註⑥に同じ。

⑧ 『源氏物語の方法』所収「紫式部の宮仕え生活と源氏物語」及び「紫式部日記における生活と文体」『国文学攷』第37号　昭和40・9

⑨ 註②に同じ。

⑩ 前掲「紫式部日記における生活と文体」

⑪ 萩谷朴氏「枕草子を意識しすぎている紫式部日記—反撥による近似、比較文学の一命題—」『二松学舎大学論集』昭和43・3

⑫ 後宮生活のわずらわしさ、人間関係の陰湿さについては、既に清水好子氏が「紫式部論」(『日本文学』昭和35・7)において触れておられる。

⑬ 岩波文庫本は「おいそけもの」とするが、黒川本その他によりテキストを改む。

⑭ 『源氏物語の研究』七十頁

⑮ 南波浩先生は、父為時のこのことばが「幼少時の式部に、一面において『優越感』—自意識の生起をもたらし、他面において、式部の心中に内的しこり—『劣等感』—自己の存在原点への内省、疑念を生起させる契機」となり、「『女』というものについての根底からの問い直しが、歴史社会との関連において、はてしなく拡大」していったと説かれている。(「紫式部の意識基体」『同志社国文学』第5・6合併号　昭和46・3)

⑯ 秋山虔氏「古代における日記文学の展開」『国文学』昭和40・8

⑰ 註②に同じ。

⑱ この日記的部分第二部がいかなる内容を有するものであったか、また日記が作者の手で二次的な成立を見たのち、後世に推定される増補、脱落等形態の問題については、別稿を期したいと思う。